

王逸「九思」考

大野圭介

富山大学人文学部紀要第70号
2019年2月
抜刷

王逸「九思」考

大野圭介

漢人による『楚辭』後期作品のうち、王褒「九懷」、劉向「九歎」、王逸「九思」は「九章」に倣った九首の詩の連作である。これらは従来屈原作品の単なる模倣に過ぎないとされ、あまり深くは研究されてこなかった憾みがある。

しかし王逸は『楚辭』に章句を施した本人であり、「九思」は現存する数少ない王逸の作品である。この作品に分析を加えることによつて、『楚辭』に対する王逸の思想、ひいては『楚辭章句』を著した意図を知る手がかりを得ることもできよう。

本論は「九思」を中心に、その主題と形式に注目し、初歩的な分析を試みるものである。

—

まず「九思」冒頭の序文を見てみよう。

九思者、王逸之所作也。逸、南陽人、博雅多覽、讀楚辭而傷愍屈原、故爲之作解。又以自屈原終沒之後、忠臣介士遊覽學者讀離騷、九章之文、莫不愴然、心爲悲感、高其節行、妙其麗雅。至劉向、王褒之徒、咸嘉其義、作賦騁辭、以讚其志。則皆列於譜錄、世世相傳。逸與屈原同土共國、悼傷之情與凡有異。竊慕向・褒之風、作頌一篇、號曰九思、以裨其辭。未有解說、故聊敘訓誼焉。

「九思」は、王逸の作品である。王逸は南陽の人、博識多読で、『楚辭』を読んで屈原を悼み憐れみ、そのためこれに注釈を施した。また屈原が亡くなった後、忠義の臣や守節の士で各地を遊覧して学ぶ者は「離騷」や「九章」の文を読むと、誰もが悼み悲しんで、

心は悲哀の感に包まれ、屈原の節操ある行いを高く評価し、その美麗典雅な文を絶妙と思った。劉向や王褒らに至っては、皆その義を褒め称え、賦を作って言葉述べ、その志を賞讃した。すると皆並んで記録され、世よ伝えられた。王逸は屈原と同郷の出身であり、彼を悼む気持ちは通常の人々とは異なるものがあつた。そこでひそかに劉向や王褒の作風を慕い、頌一篇を作り、「九思」と題し、彼らの作品を補うのである。まだ解説はないので、訓義を述べておく。

王逸は南陽の人で「與屈原同土共國」であつたために、屈原に対する同情の念も深かつた。王褒や劉向が屈原の志をたたえる作品を作つたので、その作風を慕いながら「頌」一篇を作つて「九思」と題したという。もつともこの序文が王逸の手になるものか否かは古くから疑問が示されており、宋の洪興祖『楚辭補注』は「逸不應自爲注解、恐其子延壽之徒爲之爾。（逸応に自ら注解を爲るべからず、恐らく其の子延壽の徒之を爲るのみ。）」とする一方、『四庫全書總目』は王逸以前にも『漢書』地理志や藝文志に班固の自注があることを挙げて、にわかには王延壽の作とはいえないとする³。しかし清の俞樾は「九思」逢尤「思」丁文兮聖明哲」に「丁、當也」と注しているのを挙げて、「丁」は殷の高宗武丁であつて、王逸が自ら注したなら「当」と誤ることはあり得ないとしており⁴、黄靈庚氏は「譜録」など漢代に見えない六朝の語彙が自序や注に混じつていことから、いずれも齊梁の間の作とする⁵。少なくとも「九思」の注が王逸の自注でない疑いは濃厚であり（但し本稿ではこれ以降も便宜上「自注」と呼ぶ）、序そのものも後人の仮託の疑いはあるが、『後漢書』文苑伝に王逸は南郡宜城（湖北省）の人と云い、屈原と同郷であつたことは事実であろう。「九思」の構成は次の通りである。

篇名	内容	形式
逢尤	遠遊（八極・九州） 明君忠臣と暗君佞臣 佞臣の蔓延	三言十兮十三言
怨上	佞臣の蔓延 中野の彷徨	二言十兮十二言
疾世	彷徨（漢渚） 正邪の顛倒 遠遊（崑崙）	三言十兮十二言
憫上	正邪の顛倒 彷徨	二言十兮十二言、途中から三言十兮十三言

遭厄 哀辭（屈原） 正邪の顛倒 遠遊（天界） 三言＋兮＋二言
 悼亂 正邪の顛倒・忠臣介士 彷徨（深山幽谷） 二言＋兮＋二言
 傷時 正邪の顛倒 彷徨（九夷） 遠遊（蓬萊） 三言＋兮＋二言
 哀歲 時間の推移への悲哀 彷徨（四荒） 忠臣介士 深山幽谷 二言＋兮＋二言、一部三言＋兮＋二言
 守志 遠遊（玉轡＝崑崙、天界） 三言＋兮＋二言
 乱辭 正邪の顛倒 三言＋兮＋三言

各詩の形式に注目すると、どの詩も各句の中間に兮字を置く九歌型を基本にしているが、最初の逢尤と最後の乱辭が三言＋兮＋三言で、その中間は二言＋兮＋二言と三言＋兮＋二言を交互に繰り返す形になっていて、単調にならないように工夫している。

しかしその内容を見ると、上表に示すとおりどの詩にも遠遊・忠臣介士・山野の彷徨・正邪の顛倒を通して宮廷が佞臣に占拠される様を嘆くなどのモチーフが繰り返して見える。これらは「離騷」「九章」「九辯」にもしばしば見えるものである。ここではそれらのうち「九思」の根幹を成し、表現上特色のある遠遊・正邪の顛倒・山野の彷徨について詳細に見ていこう。

（一）遠遊

「九思」第一首の「逢尤」はその冒頭で八極・九州を経巡る遠遊をしようとする歌う。

悲兮愁、哀兮憂。天生我兮當閔時、被謗譖兮虛獲尤。心煩憤兮意無聊、嚴載駕兮出戲遊。周八極兮歷九州、求軒轅兮索重華。

悲しく愁わしい、哀しく憂わしい。天は我を暗君の御代に生み給い、佞臣に讒言されて無実の罪を得た。心は千々に乱れて楽しんでまないので、車駕を整え出遊して憂いを晴らそう。八極を巡り九州を歴覽し、黄帝や舜帝のような明君を捜し求める。

最初から「悲哀」「憂愁」を漂わせ、「九辯」の冒頭「悲哉、秋之爲氣也、蕭瑟兮草木搖落而變衰（悲しいかな、秋の気配よ、さびしげに草木は揺れて落ち枯れていく）」を思わせる。続いて自分が時に遭わず生まれたことを嘆く句も、やはり「九辯」の「悼余生之不

時兮、逢此世之狂攘（我が人生の時節に遭わず、世にも恐ろしい目に遭ったことが痛ましい）を模倣しており、出遊して地上を経巡り、上古の聖人を求めるのは「離騷」や「九章」に繰り返されるモチーフである。但し重華（舜）は「離騷」や「九章」に盛んに見えるが、黄帝軒轅氏は「遠遊」に昇仙と関連付けられて見えるのみで、これを舜と並べて理想とすべき聖人とするのは『楚辞』前期作品にはない発想である。

しかしこの遠遊は、

邊倬遠兮驅林澤、步屏營兮行丘阿。車軌折兮馬虺頽、恚悵立兮涕滂沱。

にわかにはうろろると林や沼地を駆け、さまざま歩いて丘の隈を行く。車の軌（ながえと横木を繋ぐ金具）は折れて馬は病み疲れ、憔悴して滂沱の涙が落ちる。

と云うように失敗に終わる。

実際に行われる最初の遠遊は「疾世」に見える崑崙山への遊行である。

言旋邁兮北徂、叫我友兮配耦。日陰曠兮未光、閔眇窕兮靡睹。紛載驅兮高馳、將諮詢兮皇義。遵河皋兮周流、路變易兮時乖。瀟滄海兮東遊、沐盥浴兮天池。訪太昊兮道要、云靡貴兮仁義。志欣樂兮反征、就周文兮邠岐。秉玉英兮結誓、日欲暮兮心悲。惟天祿兮不再、背我信兮自違。踰隴堆兮渡漠、過桂車兮合黎。赴崑山兮舉騫、從邛遨兮棲遲。吮玉液兮止渴、翳芝華兮療飢。居惝廓兮眇疇、遠梁昌兮幾迷。望江漢兮漫渚、心緊紊兮傷懷。

言は向きを変えて遠く北へ向かい、我が友を呼んで仲間にしようとした。だが日は陰って輝かず、暗闇をうかがってもその姿は見えない。次々と車を駆って高く馳せ行き、伏羲に尋ねようとした。だが黄河の高台に沿って巡り歩いても、道は変わってしまいい時は味方しない。滄海を渡って東へ旅し、天池で沐浴して身を清めた。東方の神太昊に天の道の要諦を尋ねると、仁義より貴いものはないと言う。心は喜んで元来た道を帰り、邠・岐山の地で周の文王に仕えようとした。玉英を手にとって誓いを結ぼうとしたが、日は暮れようとしていて心は悲しい。天の幸いは二度と来ず、文王は私の忠誠に背いたので自分から去ることにした。隴堆（甘肅省）の山を越えて砂漠を渡り、西の桂車と合黎の山を過ぎる。崑崙山に赴いて騫（駿馬の名）をつなぎ止め、邛（獸の名）を従

えて周遊し静かに過ごそう。玉の汁をすすって渴きを癒やし、芝草をかじって飢えを癒やす。何もなく人影も少ないところにいて、場所を失って迷いそうになった。長江や漢水を眺めれば広々として、心はもつれて故郷を痛ましく思う。

まず「九章」懐沙と同様に「北徂」して理解者を求めるも得られず、東游して太昊に天道の要諦を尋ね、仁義を尊べという答えを聞いて喜び、今度は西のかた文王のもとに赴こうとするも、日は暮れ年は迫り、用いられないのを悲しみつつ崑崙山へ赴き昇仙しようとするが、そこにも理解者はなく悲しみに暮れて故郷を思う。

この遠遊は全体に「離騷」のプロットを借りてはいるが、神仙思想の影響が色濃くなっている。また楽園であるはずの崑崙山が孤独と悲哀に満ちた場所として描かれるのは、司馬相如「大人賦」も同様である。「離騷」の末尾も西極の崑崙まで来たところで故郷を振り返って悲しみ、彭咸の居る所へと登っていくのであるが、この悲哀はそのままだに、神仙思想で味付けされているのである。

また初句の「言」は自注に「己不見用、欲遠去也（己用いられず、遠く去らんと欲するなり）」と云う通り「われ」の意である。この用法は『詩経』周南「葛覃」の「言告師氏、言告言歸」に毛伝が「言、我也」と注する通り、『詩経』特有の語彙を意識したものとみられることは注意に値する。

続く「遭厄」では天界を遊行する描写がある。

載青雲兮上昇、適昭明兮所處。躡天衢兮長驅、踵九陽兮戲蕩。越雲漢兮南濟、秣余馬兮河鼓。雲霓紛兮晦翳、參辰回兮顛倒。逢流星兮問路、顧我指兮從左。偃姬翳兮直馳、御者迷兮失軌。遂陽逢兮邪造、與日月兮殊道。志闕絕兮安如、哀所求兮不耦。攀天階兮下視、見鄢郢兮舊宇。意逍遙兮欲歸、衆穢盛兮杳杳。思哽饒兮詰訕、涕流瀾兮如雨。

青雲に乗って上昇し、輝く太陽のいるところへ行こう。天の道を踏んで長い道のりを駆り、太陽の出るところでたゆたう。天の川を越えて南へ渡り、馬に牽牛星で秣をやる。ところが雲や虹が入り乱れて日を隠し、参や辰の星は順番が狂って道を見失う。流星に出会って道を尋ねると、私を振り返って左に行けと指さす。姫や翳の星に道を取ってまっすぐ馳せ行こうとしても、御者は迷って道を失ってしまった。かくて誤って斜めに行ってしまう、日月と道が分かれてしまった。志を遮られてどこへ行こうというのか、求める理解者を得られないのが悲しい。天の階段をよじ登って下を見れば、鄢や郢の旧居が見える。心は定まらず帰ろうとしても、

多くの悪人がはびこっている。悪人に道をふさがれなされることを思えば、涙は雨の如く流れ落ちる。雲漢を越えて行こうとしても、雲霓に覆われ星の位置も正しくなく道に迷ってしまい、地上の郢都へ帰ろうにもそこは奸臣だらけで、ただ涙を流すほかはない。遠遊はまたしても失敗に終わる。

次の遠遊は「傷時」に見える。

管束縛兮桎梏、百貿易兮傳賣。遭桓繆兮識舉、才德用兮列施。且從容兮自慰、玩琴書兮遊戲。迫中國兮連陬、吾欲之兮九夷。

斉の管仲は魯に捕えられて枷をはめられ、百里奚は諸国を転々として自らを身売りしていた。それぞれ斉の桓公や秦の繆（穆）公に見出されて取り立てられ、その才能や仁徳が用いられて行われたのだ。今しばらくゆったりと自らを慰め、音楽や書物に遊ぶとしよう。中国は狭苦しく身の置き所もないので、私は九夷の地へ行こうと思う。

と、管仲や百里奚も斉の桓公や秦の穆公に見出されてその才を用いられたことを述べてから、『論語』子罕の「子欲居九夷（子九夷に居らんと欲す）」を用いて、地上をあまねく遊行しようとすることを云う。

超五嶺兮嵯峨、觀浮石兮崔嵬。陟丹山兮炎野、屯余車兮黃支。就祝融兮稽疑、嘉已行兮無爲。乃回謁兮北逝、遇神媼兮宴娛。欲靜居兮自娛、心愁感兮不能。

南方の五嶺の険しい山々を越え、東海の浮石山が高くそびえるのを眺める。再び南方の丹山や炎野に登り、わが車を南の果ての黄支にとどめる。祝融に会って自分のいるべき場所を相談したら、自分の無為を行っていることを誉めた。そこで戻って北へ行き、神媼に会って宴飲した。静かに過ごして自らを慰めたいのだが、心は愁えるあまりそれもできない。

東方の浮石山、南方の丹山・炎野などを巡った後、南方の神の祝融と北方の神の神媼に会見するが、結局心は楽しまず、浮雲に乗って蓬萊山を目指す。

放余轡兮策駟、忽飄騰兮浮雲。蹠飛杭兮越海、從安期兮蓬萊。緣天梯兮北上、登太一兮玉臺。使素女兮鼓簧、乘戈蘇兮謳謠。聲噉訛兮清和、音晏衍兮要姪。咸欣欣兮酣樂、余眷眷兮獨悲。顧章華兮太息、志戀戀兮依依。

手綱を放して四頭の馬に鞭打つと、突然つむじ風が浮雲を舞い上げる。天の川を踏んで海を越え、蓬萊山の安期生のもとへ行く。

天の架け橋によって北に上り、太一の神のいる玉台に登る。素女に笛を吹かせると、仙人の乗戈が和して歌う。声は伸びやかで澄んでいて、音は浮靡で舞も見事。皆は喜んで宴を楽しんでいるが、私だけが故郷を思つて悲しむ。楚の章華の台を思つてはため息をつき、心は恋々として楚を離れ難い。

蓬萊山で妙なる音楽の歓待を受けても自分だけは楽しめないままである。「憫上」「遭厄」と同様のモチーフが、手を替え品を替え繰り返されるのである。この部分は「離騷」において、靈氣に勧められて二度目の遊行に出る部分に対応するが、『論語』を引いたり安期生や蓬萊山を登場させたりするなど、中原の文化を取り込んで融合させる試みも見られる。

続く「哀歳」では四荒への遊行を歌うが、出発の直後から困難が待ち受ける。

昇車兮命僕、將馳兮四荒。下堂兮見蠶、出門兮觸蜂。巷有兮蚰蜒、邑多兮螳螂。睹斯兮嫉賊、心爲兮切傷。俛念兮子胥、仰憐兮比干。投劍兮脱冕、龍屈兮蜿蜒。

車に乗って御者に命じ、四荒の地を馳せようとする。だが堂から下りればサソリがいて、門を出れば蜂に出会う。巷にはゲジがいて、街にはカマキリが多い。これらの嫉妬深い悪い奴らを見たせいで、心はまことに痛ましい。伏しては伍子胥を思い、仰いで比干を憐れむ。劍を放り出して冠を脱ぎ、龍もかんで這いつくばる。

ここでのサソリや蜂、ゲジやカマキリなどは佞人が賢者を害することをたとえる。かくて志半ばで佞臣のせいで斃れた伍子胥や比干を思いながら、遊行を中止せざるを得なくなる。

潛藏兮山澤、匍匐兮叢攢。窺見兮溪澗、流水兮沄沄。鼃鼃兮欣欣、鱣鮪兮延延。群行兮上下、駢羅兮列陳。自恨兮無友、特處兮孳孳。山沢に潜んでも、匍匐して集まってくる。谷間をうかがい見れば、流れる水は逆巻いている。亀やワニが喜んでやって来て、水蛇やナマズが長々と続く。群れを成して川を上下し、列を成して連なる。理解者がおらず、独りであることがうらめしい。

遊行は結局実現しないまま山沢に潜んでも、そこも亀やワニ、ナマズがのし歩き、主人公は孤独に苛まれることになる。最後の「守志」は崑崙山での逍遙から始まる。

陟玉巒兮逍遙、覽高岡兮峽嶠。桂樹列兮紛敷、吐紫華兮布條。實孔鸞兮所居、今其集兮惟鴟。烏鵲驚兮啞啞、余顧瞻兮悒悒。彼

日月兮闇昧、障覆天兮侵氣。

崑崙の玉の尾根に登って歩き回れば、高い峰は抜きん出てそびえる。桂樹は一面に並んで生え、紫の花を咲かせ枝が広がる。本当は孔おほいなる鸞鳥おろの棲むところ、ところが今は鴉うらばかりが集まる。カラスも驚いてぎゃあぎゃあ騒ぎ、私は遠く四方を顧みる。日月さえも暗く、天が悪い気に遮られている。

「惛惛」は自注に「四遠貌」と云い、「迢」に通じると考えられる。紫の花咲く桂樹の林に、本来なら鳳凰や鸞鳥が居るはずであるのに、ここでも鴉や烏鵲が鳴き騒ぐばかり、四方を眺めやれば日月も遮られている。「哀歳」の後半に引き続きいて楽園の喪失が歌われている。かくて主人公は天界へと旅立つ。

據羽翮兮超俗、遊陶遨兮養神。乘六蛟兮蜿蟬、遂馳騁兮陞雲。揚捰光兮爲旗、秉電策兮爲鞭。朝晨發兮鄴郢、食時至兮増泉。繞曲阿兮北次、造我車兮南端。謁玄黃兮納贄、崇忠貞兮彌堅。歷九宮兮遍觀、睹祕藏兮寶珍。就傳說兮騎龍、與織女兮合婚。舉天羣兮掩邪、穀天弧兮射姦。隨真人兮翱翔、食元氣兮長存。望太微兮穆穆、睨三階兮炳分。相輔政兮成化、建烈業兮垂勳。

羽ばたいて俗世を超え、何にも縛られず遊んで精神を養おう。六頭のうねる蛟龍に乗り、馳せ行き雲に登る。捰星の光を掲げて旗にし、稲妻を手にとって鞭にする。朝に鄴・郢の都を発ち、昼時には銀河の増泉に至る。曲がりくねった隈をめぐって北に宿り、わが車を南の果てに至らせる。中央の帝の玄黄に拝謁して礼物を納め、忠誠貞潔を貴ぶ気持ちはいよいよ堅くなる。天の九つの宮殿をあまねく見て回り、秘蔵の珍宝を見る。傳說とともに龍に乗り、織女と結婚する。天の羣ぐんを挙げて邪佞を一網打尽にし、天の弧かを引いて奸臣を射殺す。仙人について高く翔り、天の気を食らって長生きしよう。太微の宮殿を望めば近づきやすそうな姿、宮殿の三つの階段は見事な作り。天帝の政を助けて教化を成し遂げ、手柄を立てていさおを残したいものだ。

天羣・天弧とともに星の名であるが、ここでは網や弓の意味を掛けている。「朝晨發兮鄴郢、食時至兮増泉。」の二句は「離騷」の「朝發軔於蒼梧兮、夕余至乎縣圃（朝に蒼梧山から車を出発させ、夕方には崑崙山の県圃に至る）」を用いているが、その後天界の宮殿を歴訪し、傳說に従って龍に乗り、織女と結婚し、奸臣を追い払ってから真人に従って養生し、天帝を補佐して手柄を立てる。「離騷」の主人公が天の宮殿で門前払いを食らうのとは対照的だが、その末尾は

目警警兮西没、道遐迴兮阻歎。志稽積兮未通、悵敞罔兮自憐。

一瞥すれば日〔目〕は〔日〕の誤りか〕は西に沈み、道は遥かで険しい〔歎〕は〔艱〕の誤りか〕。積もる志は実現できず、
がっかりして己を憐れむのだ。

と云い、昇仙は結局夢のまま終わってしまうのである。

「九思」全体の遠遊は

八極・九州（実現せず）↓天池（太昊）・崑崙山↓天界↓九夷・蓬萊山↓四荒（実現せず）↓崑崙山・天界（昇仙に失敗）

という行程であり、「離騷」の主人公が

蒼梧山↓崑崙山↓天界（拒絶される）↓白水・閩風（遊行中止）↓天津・西極↓皇天（彭咸の居る所）

という経路をたどるとよく対応している。どこへ遊行しても理解者を得るといふ目的を達成できないのは「九思」も「離騷」も同じだが、「九思」では樂園であるはずの崑崙山にまで鴉や烏鵲が侵入し、最後の昇仙も失敗に終わるなど、より救いのない内容になっている。そして最後の乱辞では

亂曰、天庭兮雲霓藏、三光朗兮鏡萬方。斥蝮蜴兮進龜龍、策謀從兮翼機衡。配稷契兮恢唐功、嗟英俊兮未爲雙。

おさめの歌、天の庭は明るく雲や虹は隠れ、日月星の三光は明朗であらゆる方角を照らす。トカゲのような小人を退けて亀や龍のような君子を取り立てれば、政策は順調にいき天子の助けとなる。后稷や契のような名臣を配して唐堯の功績を蘇らせようにも、
ああ英俊には相手がいないのだ。

と云い、天子が聖明であれば賢者も愚者もその所を得るのに、英俊にその相手たるにふさわしい者がいないことを嘆いて終わる。遠遊を歌いながら、最後には天子が聖明であるといふ本道に返ることこそが大切だといふ諷諫を込めているのであって、『楚辞』前期作品の乱辞よりも辞賦に一層近づいた内容であるといえる。

(二) 正邪の顛倒

正邪の価値観が顛倒していることを通じて、佞臣が高位にいて賢者が遠ざけられていることを歌うのは、『楚辭』では「離騷」「九章」「九辯」に多く見られる表現である。「九思」でも正邪の顛倒が繰り返し歌われている。

まず「逢尤」では

思丁文兮聖明哲，哀平差兮迷謬愚。呂傳舉兮殷周興，忌諤專兮郢吳虛。

殷の武丁や周の文王の聖にして明哲なるを思い、楚の平王や呉王夫差の迷妄にして愚かなるを哀しむ。呂尚や傳説が取り立てられて殷や周は興り、費無忌や大宰嚭が権力を専らにして郢都も呉都も賢臣がいなくなった。

「丁」を自注は「當也。」といい、文王の時世に遭うことを思うとするが、「哀平差」と対であることから、既述の通り殷の武丁とする。愈樾の説がよいであろう。「平」は楚の平王、「差」は呉王夫差。「呂」は太公望呂尚、「傳」は殷の傳説、「忌」は楚の大夫費無忌、「嚭」は呉の大宰嚭。明君と暗君、賢臣と奸臣を対比させながら時世に遭わず佞臣に妨げられることを嘆くのは、「九章」諸篇にも、たとえば「惜往日」に

聞百里之爲虜兮，伊尹烹於庖廚。呂望屠於朝歌兮，甯戚歌而飯牛。不逢湯武與桓繆兮，世孰云而知之。吳信讒而弗味兮，子胥死而後憂。介子忠而立枯兮，文君寤而追求。封介山而爲之禁兮，報大德之優游。

聞くところでは百里奚は囚われの身となり、伊尹は厨房で料理人になっていた。太公望呂尚は朝歌で屠殺人になっていて、甯戚は歌いながら牛飼いをしていた。彼らが殷の湯王・周の武王・斉の桓公・秦の穆公に出会わなかったら、世の中の誰にその名を知られるようになったらどうか。呉王は讒言を信じて忠臣の言を吟味しなかったばかりに、伍子胥を殺してから亡国の憂き目に遭った。介子推は忠信を守って山に隠れて死に、晋の文公はやっと過ちを悟って彼を呼び戻そうとした。その山を介山と名づけて介子推の領地に封じ、彼の大徳ある靈魂に報いたのだ。

と云うように、繰り返し現れるモチーフである。「逢尤」はさらに

虎兕爭兮於廷中，豺狼鬪兮我之隅。雲霧會兮日冥晦，飄風起兮揚塵埃。

虎や兕（悪獣の名）が宮廷で権力を争い、豺やまいぬや狼が私のそばで言い争っている。雲や霧が集まって日は暗く覆われ、つむじ風が起こって塵埃が巻き上がる。

と、佞臣を虎兕豺狼や雲霧・飄風にたとえ、宮廷がそれらに占拠されるさまを生々しく描いている。前半の虎兕豺狼は「招魂」に

魂兮歸來、君無上天些。虎豹九關、啄害下人些。一夫九首、拔木九千些。豺狼從目、往來僉僉些。

魂よ、帰り来たれ。そなたは天上にいるべきではない。虎や豹が九つの天門を守り、地上の人をかみ殺すのだ。九つの頭を持つ丈夫ますらおがいて、九千本もの大木を一日で抜いてしまうほどだ。豺や狼が目を縦につり上げて、我先にと争いながら走り回っているのだ。

と云い、死後の天上世界の恐ろしさを云うのに用いられているが、これを佞臣にたとえるのは『楚辭』では他に見られない。一方後半は「離騷」に

吾令鳳鳥飛騰兮、繼之以日夜。飄風屯其相離兮、帥雲霓而來御。

私は鳳凰に高く飛び上がらせ、日に夜を継いで飛んでいこうとした。ところがつむじ風が集まっては私と引き離そうとし、雲や虹を引き連れて私を迎えようとする。

と云い、この飄風と雲霓は王逸がそれぞれ「以興邪惡之衆」「以喻佞人」としている。「逢尤」の雲霧と飄風もこれを借りたものである。このように奸臣をどう表現するかは王逸の独創も見られるとはいえ、佞臣に宮廷が占拠されるさま自体は「離騷」や「九章」で盛んに描かれ、新味のないものである。

続く「怨上」は冒頭から令尹が佞臣を重用して国中が乱れるさまを描く。

令尹兮警警、群司兮譟譟。哀哉兮溷溷、上下兮同流。菽藟兮蔓衍、芳藹兮挫枯。朱紫兮雜亂、曾莫兮別諸。倚此兮巖穴、永思兮劬悠。

令尹は忠臣の言うことをまともに聴かず、群臣は取り入ろうと争っている。哀しいかな、国中が乱れ、上から下まで同じように悪に染まっている。雑草が蔓延し、香草は枯れて打ち捨てられる。朱に紫が入り混じり、それらを区別できる者としてない。それでこの岩穴にこもったが、憂える思いは遙かに続く。

「警警」は自注に「不聽話言而妄語也」と云い、人の話を聞かずみだりに人をそしるさま。後半四句は蔓草がはびこって香草が枯れる

さまざまで佞臣が宮廷にはびこることをたとえた後に山中への隠棲をうたうが、「九章」悲回風にも

故荼薺不同畝兮、蘭茝幽而獨芳。……惟佳人之獨懷兮、折若椒以自處。曾獻歎之嗟嗟兮、獨隱伏而思慮。

それで茶と薺（ちが）は同じ畝には生えず、蘭茝（香草）はひっそりと独り芳香を放つ。……ただわが良き君主を思い、若椒（香草）を手折って節操を守ろう。何度もすすり泣きながら嘆き、独り隠れ住んで思いは巡る。

という類似の表現がある。

「疾世」では最初に漢渚を彷徨しながら水神を求める情景に続いて、小鳥が鳴き騒ぐさまを宮廷に小人がはびこるさまにたとえている。

周徘徊兮漢渚、求水神兮靈女。嗟此國兮無良、媒女詘兮諛護。鳩雀列兮謹謹、鵠鳴兮聒余。抱昭華兮寶璋、欲銜鬻兮莫取。

漢水の岸をさまよいながら、水中の神女を求める。ああこの国に善人はおらず、仲人さえも言を左右にしてでたらめばかり。ウズラやスズメが並んでがやがや鳴き、鵠（九官鳥）も鳴き騒いでやかましい。昭華や寶璋の玉を抱きながら、それを売り込もうとしても買う人としてない。

その描写は「九章」涉江の乱辞に

鸞鳥鳳皇、日以遠兮。燕雀烏鵲、巢堂壇兮。露申辛夷、死林薄兮。腥臊竝御、芳不得薄兮。

鸞鳥や鳳凰は、日に日に遠ざかっていく。ツバメやスズメ、カラスやカササギが、諸侯の会合する堂壇に巢をかけている。露申や辛夷（ともに香木）は、林や藪で枯死する。生臭いものが進められ、芳しいものは近づくこともできない。

「懷沙」に

懷瑾握瑜兮、窮不知所示。

瑾や瑜の美玉を手にしながら、窮地にあつてはそれを示すすべもない。

という類似の表現が見られるが、描写はより生々しくなっている。

「憫上」では前半で「九章」に見られるような正邪の顛倒をうたう。

衆多兮阿媚、讖靡兮成俗。貪枉兮黨比、貞良兮榮獨。鵠竄兮枳棘、鵝集兮帷幄。蘭蕙兮青蔥、槁本兮萎落。

多くの人が阿りへつらい、にこやかな顔を作つて低俗に振舞う。不正をして財を貪る者が朋党を組み、貞潔忠良の臣は孤立無援。鵠おとりはいばらの中に隠れ、鵯ベカクが帳の中に集まる。藜藜や青蔥、槁本（ともに香草）は枯れ落ちる。

「懷沙」には

變白以爲黒兮、倒上以爲下。鳳皇在笄兮、雞鶩翔舞。同糶玉石兮、一概而相量。

白を變じて黒となし、上を逆さまにして下となす。鳳凰は籠の中にいて、鶏やカモが翔り舞う。玉も石もこき混ぜて、同じ概とがきと一緒に量る。

と云い、このモチーフを借りているのは明白であろう。

続く「遭厄」で初めて屈原への哀辞が歌われ、その後「憫上」と同様の正邪の顛倒が歌われる。

悼屈子兮遭厄、沈玉躬兮湘汨。何楚國兮難化、迄于今兮不易。士莫志兮羔裘、競佞諛兮讒譖。指正義兮爲曲、訛玉璧兮爲石。鴛鵲遊兮華屋、駿驥棲兮柴族。

屈原が災難に遭われ、その賢なる御身を汨羅江に沈めたもうたことを悼む。楚国の何と教化し難いことよ、今に至るまでその悪習は変わらない。士には衣冠を正して忠直ならんとする志もなく、へつらつて讒言することを競っている。正義を指して不正直だとし、玉や璧を石だとそしる。鴛鵲（悪鳥の名）が立派な建物の中で遊び、駿や驥（鳥の名）が叢生する柴の中に棲む。

王褒「九懷」尊嘉では

伍胥兮浮江、屈子兮沈湘。運余兮念茲、心内兮懷傷。

伍子胥の屍が長江に浮かび、屈原は瀟湘に沈んだ。我が身に翻つてこれを思えば、心の内は傷ましい。

と云い、屈原を悼むよりも、伍子胥とともに引き合いに出して自らの不遇を嘆くような歌い方である。嚴忌「哀時命」も

子胥死而成義兮、屈原沈於汨羅。雖體解其不變兮、豈忠信之可化。

伍子胥は死して義を成し、屈原は汨羅に沈んだ。体をばらばらにされても変わらないものがある、忠信をどうして変えることができようか。

と云うが、「離騷」の

雖體解吾猶未變兮、豈余心之可懲。

体をばらばらにされたとしても私は変わらない、わが心をどうして懲りさせることができようか。

を踏まえて、たとえ支解の刑になったとして自分の忠誠心が変わることがあるうかと云うのであって、やはり屈原を悼む表現ではない。また劉向「九歎」は劉向自身が屈原に成り代わって歌うような調子であり、「遠逝」に至って

覽屈氏之離騷兮、心哀哀而怫鬱。聲嗷嗷以寂寥兮、顧僕夫之憔悴。

屈原の「離騷」を読むと、心は悲しみのあまり気がふさぐ。声を限りに呼んでも答える人もなく、御者を顧みれば憔悴した様子。と云うが、己を屈原に重ね合わせているのであって、屈原を直接に悼むものではない。王逸の「何楚國兮難化、迄于今兮不易。」はこれらに比べれば屈原の憂国の思いを代弁し、継承する王逸の意図が凝縮されていると云えよう。

続く「悼乱」は最初に正邪の顛倒を述べるが、西周から春秋戦国にかけての忠臣賢者が災厄に遭い、佞臣が君の側に侍るさまを描くのが特色である。

督萬兮侍宴、周邵兮負芻。白龍兮見射、靈龜兮執拘。仲尼兮困厄、鄒衍兮幽囚。

宋の華督や南宮長万のような輩が宴席に侍り、周公旦や召公奭のような忠臣が秣を背負う有り様。水神の白龍は射られ、瑞祥の靈龜が捕らえられる。孔子は陳・蔡で災厄に苦しみ、鄒衍は斉で囚われの身となった。

「督萬」は宋の殤公を弑した大夫華督⁷と、宋の閔公を弑した南宮長万⁸。「周邵」は周公旦と召公奭。「九章」諸篇では伊尹・比干・甯戚・伍子胥・百里奚・介子推らの忠臣介士がしばしば引かれるが、「悼乱」のこの一節に見える人物は『楚辭』前期作品には全く見えない。

次の「傷時」は

惟昊天兮昭靈、陽氣發兮清明。風習習兮飀煖、百草萌兮華榮。莖荼茂兮扶疏、薜芷彫兮瑩嫿。

初夏の空は明るく、陽気は起こって清々しい。風はそよそよと温かく、諸々の草が萌えて出て花が咲く。莖あざみや茶ながなが生い茂り、薜芷が萎れて縮こまる。

と、春の陽気に草花が萌え出でることから歌い起こし、雑草が茂って香草が萎れることへとつなげて正邪の顛倒と佞臣の蔓延を歌う。その後

管束縛兮桎梏、百貿易兮傳賣。遭桓繆兮識舉、才德用兮列施。且從谷兮自慰、玩琴書兮遊戲。迫中國兮沓陘、吾欲之兮九夷。齊の管仲は魯に捕えられて枷をはめられ、百里奚は諸国を転々として自らを身売りしていた。それぞれ齊の桓公や秦の繆（穆）公に見出されて取り立てられ、その才能や仁徳が用いられて行われたのだ。しばらくゆったりと自らを慰め、音楽や書物の世界に遊ぼう。中国の狭さに身の置き所もないので、私は九夷の国へ行こうと思う。

と、管仲や百里奚も齊の桓公や秦の穆公に見出されてその才を用いられたことを述べてから、地上への遊行に移る。

このように見えてくると、価値の顛倒を歌うこと自体に新味はないとはいえ、これに用いるモチーフは楚地の名物にこだわらず中原の人物や名物を用いるなど、新しい工夫も見られる。

(三) 彷徨と隠棲

『楚辞』では山野を彷徨したり、そこに隠棲したりする描写が「九章」や「九辯」に見られる。「九思」ではまず「怨上」に

進惡兮九旬、復顧兮彭務。擬斯兮二蹤、未知兮所投。謠吟兮中野、上察兮璇璣。大火兮西睨、攝提兮運低。雷霆兮碾礪、電霰兮霏霏。奔電兮光晃、涼風兮愴悽。鳥獸兮驚駭、相從兮宿棲。鴛鴦兮啾啾、狐狸兮微微。哀吾兮介特、獨處兮罔依。螻蛄兮鳴東、蝻蠹兮號西。載緣兮我裳、蠋入兮我懷。蟲多兮夾余、惆悵兮自悲。

殷の紂王は九十日も燕飲したというので、また入水した彭咸と務光を顧みる。この二人の足跡に統こうとしても、身投げできる場所もわからない。野のただ中で吟じ歌い、璇璣の星を仰ぎ見る。大火の星を西に見れば、攝提の星は低く運行する。雷はゴロゴロと、電や霰は降りしきる。稲妻は明るく光り、涼風は吹きすぎぶ。鳥獸も驚き、連れだつてねぐらに入る。鴛鴦は鳴き交わし、狐狸も連れ立っていく。私だけは独りで、寄る辺もないのが哀しい。秋蟬は東に向かって鳴き、茅蜩も西に向かって鳴く。刺す虫が裳裾に取り付き、芋虫は懐に入り込む。虫どもが私に近づき、失意のうちに自ら悲しむ。

「進惡兮九旬」は殷の紂王が九十日にわたって燕飲して政務を聴かなかったことを云い、「彭務」は彭咸と務光を指す。この二人に続いて自沈しようとしても果たせず、吟じながら中野を彷徨する。空には雷電がとどろき、冷たい風が吹き、鳥や獣も鳴き叫びながら連れだつて巢に帰ることを歌いながら自らの孤独を嘆く。ここに見える鴛鴦・狐狸・蝮蛇・蝨・蠍・蠶・蠃・蠨は「九歌」山鬼に「赤狐」がある他は「楚辭」前期作品に見えず、むしろ鴛鴦は『詩経』小雅「鴛鴦」などに、蝮も同・爾風「東山」に見え、また「電霰兮霏霏」も同・小雅「采芣」などに「雨雪霏霏」と見えるなど、『詩経』を意識したものであろう。

「悼乱」は後半で山中への隱棲を描くが、ここで特徴的なのは『詩経』に見える表現を明確に用いていることである。
 鶉鷓兮啾啾、山鵲兮嚶嚶。鴻鷓兮振翅、歸鴈兮于征。

ウグイスは鳴き交わし、カササギは澄んだ声で鳴く。鴻（大型の雁）や鷓鴣（鴉）は羽を振るい、雁は北へ帰ろうと飛んで行く。一句目は小雅「出車」の「倉庚啾啾」を、二句目は同「伐木」の「鳥鳴嚶嚶」を、三・四句目も小雅「鴻鷓」の「鴻鷓于飛、肅肅其羽。之子于征、劬勞于野。（雁が飛びゆく、シユツシユツと羽を振るって。あの人は出征して、野で疲れている。）」を用いている。王逸はしばしば『詩経』を用いて『楚辭』の字句の訓詁を行っており、離騷を「離騷經」と呼んで『詩経』と並ぶ經典に高めようとしていたことから、自身の作品にも『詩経』の詩句を取り込んで見せたのであろう。

「哀歳」では先に述べた通り、四荒への遊行が失敗したのち山沢に潜んでも、亀やワニの住む世界で孤独にさいなまれる様子が描かれる。

このように「九思」は情景描写においても『楚辭』特有の語彙や表現にこだわらず、『詩経』の語彙や表現を取り込む工夫を行っているのである。

二

次に「九思」の詩型について検討しよう。王逸は『楚辭』に注を施した以上、その全ての形式に通曉していたはずであり、「九思」の九歌形式も偶然ではなく積極的な意図を持って選んだはずである。

漢代の『楚辭』後期作品のうち、「九」と題する作品は王褒「九懷」、劉向「九歎」と王逸「九思」の三つである。これらの「九」体三詩のうち、九歌型は王褒「九懷」と王逸「九思」のみであり、「九」体以外の『楚辭』後期作品は「招隱士」が九歌型・離騷型・懷沙型の混合である以外はすべて離騷型である。

では王褒と王逸が九歌型を採用したのはどのような意味があるのでしょうか。『史記』屈原列伝の「太史公曰」は「離騷」「天問」「哀郢」「招魂」に言及しているが「九歌」の名はない。しかし九歌型の歌謡は『史記』刺客列伝に荊軻の「易水歌」、同・項羽本紀に項羽の「垓下歌」、同・高祖本紀に劉邦の「大風歌」などが記録されており、また『史記』樂書には

高祖過沛詩三侯之章、令小兒歌之。高祖崩、令沛得_レ以四時歌舞宗廟。孝惠・孝文・孝景無所增更、於樂府習常肄舊而已。

高祖沛を過りて詩三侯の章（大風歌をさす）あり、小兒をして之を歌わしむ。高祖崩じ、沛をして四時を以て宗廟に歌舞（舞）するを得しむ。孝惠・孝文・孝景増し更むる所無く、樂府に於いて常を習い旧を肄_なうのみ。

と、高祖の死後沛の人々に「大風歌」を宗廟で歌わせたことと云うことから、高祖が「大風歌」を作つて歌わせたこと自体は事実と考えられる。そして漢の武帝も

瓠子決兮將奈何、皓皓盱盱兮閭殫爲河。殫爲河兮地不得寧、功無已時兮吾山平。吾山平兮鉅野溢、魚沸鬱兮柏冬日。延道弛兮離常流、蛟龍騁兮方遠遊。……

瓠子で堤防が切れたのを一体どうしようか、水は盛んに流れて村はすべて川になってしまった。すべて川になってしまったらその土地は安心して暮らせない、工事はいつまでたつても終わらず山も平らになる有り様、山が平らになれば鉅野の地も水が溢れ、魚も楽しめます冬が近づいている。正道は緩んで本来の流れを離れ、蛟龍が馳せて遠くへ飛び回ろうとする。……（瓠子歌）

太一貢兮天馬下、霑赤汗兮沫流緒。騁容與兮躡萬里、今安匹兮龍爲友。

太一の神が天馬を下したもうた、血の汗にぬれて泡が流れて赤い。ゆったりと馳せて万里の道を越え、今や匹敵する者はなく龍を友とする。（天馬歌）

天馬來兮從西極、經萬里兮歸有德。承靈威兮降外國、涉流沙兮四夷服。

天馬が西の果てからやって来て、万里の道を経て徳ある天子のもとに帰順した。天子の靈威を受けて外国を降伏させ、流沙を渡れば四夷も服従するであろう。(西極天馬歌)

のような九歌型の歌を自ら作ったことが『史記』樂書や河渠書、『漢書』溝洫志に記されている。このような九歌型の歌の流行が、武帝以後の人物である王褒・劉向・王逸に影響を与えた可能性は十分考えられる。それとともに「九歌」や「九章」が王褒以前には既に現在の『楚辭章句』に見られる形で成立していたであろうことも、彼らにこれらを模した「九」体詩を作らせる動機になったのであろう。しかし「九」体三詩は単純に「九歌」や「九章」を模したものではなかった。まず王褒「九懷」を見ると、第一首から第八首までは二言＋兮＋二言と三言＋兮＋二言の句形が交互に用いられ、その表現も「九辯」や「九章」を借りたものが多いが、最後の「株昭」のみは奇数句が四言＋兮、偶数句が四言の懷沙型で、その末尾は

余私娛茲兮、孰哉復加。還顧世俗兮、壞敗罔羅。卷佩將逝兮、涕流滂沲。

私はひそかにこれを楽しむ、誰がまたこの上に楽しみを加えられようか。振り返って世俗の人々を見れば、頽廢が網の如く覆っている。衣の袖を掲げていざ行かん、滂沲の涙があふれ出る。

と「懷沙」に似た雰圍気で自決を暗示するものになっている。最後に乱辭があり、本文では用いられていない三言＋兮＋三言の形式で、

亂曰、皇門開兮照下土、株穢除兮蘭芷晡。四佞放兮後得禹、聖舜攝兮昭堯緒、孰能若兮願爲輔。

おさめの歌、天門は開いて天下を照覽し、雜草が除かれて蘭芷が見えるようになる。驩兜、共工、三苗、鯀の四佞が放逐されてから禹が臣となり、聖明なる舜が攝政となって堯の事業を輝かせた。そのような明君がいれば股肱の忠臣となって輔佐したいものだ。

と結ぶ。形式こそ九歌形式だが、その内容は「離騷」や「九辯」「九章」を借りており、これによって伝統的な『楚辭』作品の様式に新味を持たせようとしたのであろう。

これに対して劉向「九歎」はやや趣向が異なり、形式は離騷形式で、その冒頭の「逢紛」は

伊伯庸之末胄兮、諒皇直之屈原。云余肇祖于高陽兮、惟楚懷之嬋連。原生受命于貞節兮、鴻永路有嘉名。齊名字於天地兮、竝光

明於列星。

彼こそは伯庸の末裔、まことに忠直の徳輝く屈原なり。言えらく我が始祖は顓頊高陽氏、これ楚の懷王に連なる一族なり。もとより生まれながら貞節の天命を授かり、大いなる常道にかなう良き名を授かった。「原」の名は天地に等しく、連なる星々にも並ぶ輝かしき。

と、「離騷」の冒頭の

帝高陽之苗裔兮、朕皇考曰伯庸。攝提貞于孟陬兮、惟庚寅吾以降。皇覽揆余初度兮、肇錫余以嘉名。名余曰正則兮、字余曰靈均。紛吾既有此内美兮、又重之以修能。

我は顓頊高陽氏の末裔にて、我が亡父の名は伯庸。寅年の正月寅の月、庚寅の日にこそ我は生まれ落ちた。父は我の生まれた様子をみて、最初に良き名を我に賜わった。我が名は正則、字は靈均。我は生まれながら盛んなる美徳を秘め、これに重ねて優れた才能を持っていた。

を焼き直したような歌い出しである。以下第八首の「思古」までは「九章」に似た雰囲気で、孤独に鬱々としながら各地を彷徨する様子が繰り返して歌われる。最後の「遠遊」で崑崙山から四方を遠遊する場面が描かれるが、最後は愁いを解けないまま故郷に戻り、「聊假日以須臾兮、何騷騷而自故。（日を借りてつかの間楽しもうとしても、どうして心は愁えて元のままなのか）」と結ぶ。これは「離騷」の末尾の「奏九歌而舞韶兮、聊假日以媮樂（九歌を奏で韶を舞い、しばらく日を借りて楽しもう）」を借りている。

「九歎」は他の「九」体詩とは異なり、各歌の末尾に「歎曰」という形で乱辞を付している。形式は奇数句が四言、偶数句が三言＋兮の橘頌形式で、「懷沙」の乱辞に倣ったものである。総じて「九歎」は「九章」の形式に忠実に倣いながら、そこに「離騷」の内容を盛り込んで、雑多な内容を含む「九章」を整理したような趣があるが、「九歎」最後の「遠遊」の歎辞は

歎曰、譬彼蛟龍、乘雲浮兮。汎淫瀕浴、紛若霧兮。潺湲輻輳、雷動電發、馭高舉兮。升虛凌冥、沛濁浮清、入帝宮兮。搖翹奮羽、馳風騁雨、遊無窮兮。

嘆じて言う、たとえばあの蛟龍は、雲に乗って浮かぶ。漂いながら踊り回り、霧のように見え隠れする。水の流れのように入り

乱れ、雷がとどろき稲妻が起こり、それに乗って高く挙がる。虚空に登り暗闇をしのぎ、汚濁を捨てて清浄の氣に浮かび、天帝の宮殿に入る。尾羽を揺らし羽を奮い、雨風に馳せ回り、無限の彼方まで飛んで行く。

と云い、優れた徳を持ちながら用いられないさまを蛟竜が浮雲に乗って漂うさまにたとえる。王逸は「もし明君に出会えたら宮廷に入って奸臣を却け、賢君を輔けて民に恵みをもたらしたものだ」という志」と解するが、「九懷」の乱辭に比べると婉曲な表現となっている。そして王逸「九思」は、王褒に倣って再び九歌型を採用している。既述のように、王逸は屈原と同じ楚地の出身であり、「九思」序によれば人一倍屈原を悼み同情する心を持っていた。これが本当に王逸の手になる文かどうかは疑わしいとしても、「離騷」に王逸がつけた後叙に

屈原履忠被譖、憂悲愁思。獨依詩人之義而作離騷、上以諷諫、下以自慰。遭時闇亂、不見省納、不勝憤懣、遂復作九歌以下凡二十五篇。楚人高其行義、璋其文采、以相教傳。

屈原は忠義を行いながら讒言に遭い、憂い悲しむ思いに包まれていた。独り『詩経』の詩人の義によって「離騷」を作り、上には君主を諷諫し、下には自らを慰めた。時世の混乱に遭い、君主に容れられず、憤懣にたえず、そこで「九歌」以下の全部で二十五篇を作った。楚の人々はその義ある行いを高く評価し、その文才を優れているとして、教え伝えたのだ。

と云うことから、「九思」序が決して誇張ではないことがうかがえる。「離騷」後叙はさらに

逮至劉向、典校經書、分爲十六卷。孝章即位、深弘道藝、而班固・賈逵復以所見改易前疑、各作離騷經章句。其餘十五卷、闕而不說。又以壯爲狀、義多乖異、事不要括。今臣復以所識所知、稽之舊章、合之經傳、作十六卷章句。

劉向に至って、經書の校定を行い、「楚辭」を分けて十六卷とした。章帝が即位すると、道徳や学芸を深め広めようとしたので、班固や賈逵が自身の見解によって旧説の疑わしい点を改め、それぞれ「離騷經章句」を作った。（それらは「離騷」以外の）十五卷については、注を欠いていて説明していない。また「壯」の字を「狀」にするなど、その義には誤りが多く、事柄についても要領を得ていない。そこで私もまた自分の知っていることによって、古い章句と考え合わせ、經伝を合わせて、十六卷の章句を作った。と云い、劉向や班固・賈逵の章句が不十分で満足できないので自らも章句を作ったと述べている。それ故『楚辭』旧来の様式に回帰し

たような劉向の作風にも不満を抱いていたのであり、九歌形式を採りながら王褒の作品ともまた異なる工夫を加えたのであろう。「九」体三詩は決して単に屈原作品を模倣したのではなく、三者それぞれに形式面に新しさを加えながら『楚辞』文芸を変革しようとしたのである。

三

王逸にとって『楚辞』と呼べるのはどのような作品だったのであろうか。星川清孝は漢以後の『楚辞』作品は「哀辞・弔辞」と「神游」が柱となっていると指摘する。「離騷」の「騷」は「憂」の意であり、九章には「惜誦」「惜往日」「哀郢」「悲回風」など悲哀を表す文字が題に含まれるものが多い。「この憂愁悲哀の色が楚辞の特色ともいべきものである」と星川氏は云う¹⁰。たとえば賈誼の「弔屈原」が懐沙型の句型で序文を持たない完全な『楚辞』形式であるのに『楚辞章句』に採られていないのは、屈原への弔辞だけで神游の要素がないためである。これに対して同じ賈誼の「惜誓」は忠臣介士への哀辞と神游をもに含んでいるから『楚辞章句』に収められたのである。

王逸は劉向や王褒の作品には神游があっても哀辞が十分なものではないと考えていたのであろう。特に屈原その人への直接的な哀辞は「九懷」「九歎」とも見られない。彼は神游・哀辞に加えて香草・佞臣・価値の顛倒など離騷・九章に見えているモチーフを盛り込み、屈原作品の形式を用いた作品を『楚辞』作品と見なしたのであろう。王逸は「九思」でそれを実践してみせたのである。

小南一郎は『楚辞』文芸の中の「游」について、「遠遊篇以後の楚辞後期作品において、『游』の描写の伝統はとぎれることなく引き継がれ、王逸の九思篇にまで至っている。ただ、その内容はマンネリズムに毒されたところが多¹¹」いと指摘する¹¹。しかし「九」体三詩を仔細に見れば、「神游」と「哀辞」を含む楚辞文芸の枠組みの中で、それぞれに変革を試みていたことがわかる。特に王逸は『楚辞』に劉向・班固・賈逵らの欠を補う章句を付すことによって、辞賦に押されて衰退しつつあった『楚辞』文芸の復興を図っていた。そのためには新しい楚辞作品を自ら提示する必要があるためである。

だが楚辞文芸は「知識人としてのみずからの存在を、屈原伝説という枠組みの中で表明するという表現形式自体の限界」¹²を超える

ことはできなかつた。王逸とほぼ同時代の張衡「思玄賦」のように、屈原伝説を離れて全く自由に遠遊を歌い、しかも「不出戸而知天下兮、何必歴遠以劬勞（戸を出ずして天下を知れば¹³、どうして遠方を歴訪して苦勞することがあるうか。）」と、遠遊など必要ないと歌う辞賦作品が現れるに至って、『楚辞』文芸はその役割を終えたのである。

附記 本論文は二〇一七年十一月に中国雲南省昆明市にて開催された「二〇一七年楚辞国際学術研討会暨中国屈原学会第十七届年会」での口頭発表「王逸《九思》考」をもとに若干の加筆修正を加えたものである。また本研究はJSPS科研費（課題番号17K02635・16K02683）の助成を受けたものである。

注

- 1 「九思」を収める『楚辞章句』の底本には借陰軒叢書本『楚辞補注』（台湾芸文印書館影印）を用い、必要に応じて他の諸本を参照した。
- 2 「逸、南陽人……作解。又以」は底本以外の諸本になく、後人の増補とみられる。黄靈庚『楚辞章句疏証』第五冊（中華書局、二〇〇七年）二八三〇頁参照。
- 3 原文：漢書地理志・藝文志即有自注、事在逸前。謝靈運作山居賦又自注之、安知非用逸例耶。旧説無文、未可遽疑爲延壽作也。
- 4 「丁者、武丁也。文者、文王也。呂者、呂尚也。傅者、傅説也。忌者、費無忌也。誣者、宰誣也。……文義甚明、而注者乃不知丁爲武丁、以當釋之、使王逸自作自注、何至有此謬乎。」（兪樾『諸子平議補録』楚辞）
- 5 黄靈庚、前掲書、二八三三～二八三四頁。
- 6 聞一多『楚辞校補』九思・守志（聞一多全集）五、湖北人民出版社、一九九三年、二四八頁。原著国民図書出版社、一九四二年）に「目當作日、歎當作艱」と云う。
- 7 『春秋左氏伝』桓公二年に「春、宋督攻孔氏、殺孔父而取其妻。公怒、督懼、遂弑殤公（春、宋督孔氏を攻め、孔父を殺して其の妻を取る。公怒り、督懼れ、遂に殤公を弑す）」と云う。
- 8 『春秋左氏伝』莊公十二年に「秋、宋萬弑閔公于蒙澤、遇仇牧于門、批而殺之、遇大宰督于東宮之西、又殺之、立子游（秋、宋の万（南宮長万）閔公を蒙沢に弑し、（宋の大宰）仇牧に門に遇い、批にして之を殺し、大宰督に東宮の西に遇い、又た之を殺し、子游を立つ）」と云う。
- 9 もっとも後漢初期の辞賦、たとえば班彪「北征賦」等にも『詩経』を踏まえた表現が見られるが、これと『楚辞章句』との関連については別稿に譲りたい。

- 10 星川清孝『楚辞の研究』、養徳社、一九六一年、四五五頁。
- 11 小南一郎『楚辞とその注釈者たち』、朋友書店、二〇〇三年、二八九頁。
- 12 小南一郎、前掲書、二九一頁。
- 13 この句は『老子』四十七章に「不出戸知天下、不闚牖見天道（戸を出でずして天下を知り、まど牖をうかが闚わずして天道を見る）」と云うのによる。

